

リレー連載 執筆者の素顔 (Tomy Jr.の巻)

編集長から新企画の第一回目の執筆担当を仰せつかってしまった。トップバッターは誠に光栄だが責任も重大だ。私のせいでこのコラムが企画意図に沿わない方向に進んでしまったら大変だ。そう思って企画の趣旨を拝読したのだが、読めば読むほど奥が深く、ハタと考え込んでしまった。

●素顔の写真

そもそも「素顔」とは何か？私は女性ではないので化粧はしないからいつでもスピンではあるが、スピンだからといって素顔とは言えないだろう。そして「素」というからには表情なども含め飾っていない、そのままの姿でなければならぬはず。そう考えるとまず写真選びが難しい。つまるところ、素顔の写真とは、撮られることを意識していないか、意識する余裕もない状況で撮られたものがベストだろう。しかし、そういうショットはなかなかないものだ。その中で、これならまあまあ「素」ではないかと思える写真をやっと見つけた。家族で新宿のお好み屋に行った時のスナップだ。



左の写真は撮られることを意識していなかったショットだし、右は撮られることは分かっていたものの、カメラを意識する余裕がないくらい緊張した状況、すなわち見てお分かりの通り、お好み焼きをひっくり返す瞬間の写真である。しかしまあ、こうして客観的に見ると表情が真剣なだけにバカバカしい。

次に、これらの写真をもとに文章で私の「素顔」について何が書けるかを考えてみた。わざわざ文章で書くのだから「ハンサムだ」「いい男だ」というような、写真を一目見れば誰でも分かる事実を書

き連ねても意味はなかろう。もし書くのなら、この素顔を形成してきた歴史の観点ではないだろうか。例えば、その人の育った時代背景や素顔形成の過程を垣間見る上でも「これまで誰に似ていると言われたか」という設問は意味があるのではないか。そう考えて、この設問は以降の執筆者に対してもリレーで掲載を望むものである。

●これまで誰に似ていると言われたか？

就学前……飯田久彦(「レイジアナ・ママ」で知られるロカビリー歌手)

小学時代……う〜ん、あまり記憶なし

中学時代……桂米丸(落語家)、愛川欣也(DJ)

高校時代……夏八木勲(俳優)、大杉勝男(プロ野球選手)

大学時代……松崎しげる(歌手)、コアラ(動物)

社会人……ウド鈴木(お笑いタレント)、北原照久(おもちゃ博物館館長)

もう一つの観点は、「執筆者の」と付くところがヒントだろう。つまり、読者は普段は作品を通して想像するしかないのだが、一体どんな人物がその作品を執筆しているのかという「作品との接点」と、逆に執筆者としての顔以外にはどんな側面があるのかという「意外な点」の2点がこのコラムの対象になるに違いない。後者については「もう一人の私」という項で触れるとして、前者については、執筆者が現在の作品を執筆するに至った過程および動機を計り知る意味から、子供のころから「これまでに何(誰)になりたかったか」という設問も大いに意味があるに違いない。そう考えて、この設問も以降の執筆者に対してもリレー掲載を望むものである。

●これまで何(誰)になりたかったか？

小学生低学年の頃……プロ野球選手(特に長島茂雄)

小学生高学年の頃……自動車のデザイナー、「それゆけ、スマート」のスマート

中学生の頃……政治家(総理大臣より議長)

高校の頃……記憶にありません

大学の頃……(漠然と)コンピュータの世界で飯が食えればいいかな

社会人になって……ソフトウェア技術者になり、現在はソフト会社の広報担当

作品との接点ということでは、「デザイナーの居ない風景」という作品を書いている私だが、実際にデザイナーを志向した時期はあった。小学校の頃、特に自動車が好きだった私は車のプラモデルばかり作っていたが、驚くべきことに当時、日本車のプラモデルは皆無だった。その理由は多分、日本車が格好悪かったからである。私はそれが悔しくてならなかった。「どうして日本車はあんなに格好悪いのか。いつか外車に負けない格好いい日本車を作りたい」そう考えて私は自動車のデザ

イナーになろうと思った。私は「図工」はいつも5段階評価で5を取っていたのだ。しかし、服飾デザイナーだった母が「工業デザイナーは数学が出来なきゃなれないよ」とひとこと言っただけで、私はその夢をあっさり諦めてしまった。小学校6年間で5を取れた科目は「図工」だけだったからだ。

●もうひとりの私

さて、執筆者以外の私、つまり「もうひとりの私」としては造形作家としての「素顔」をご紹介したい。DGにはYUKA&TICAさんのように造形作家もおられるので恥ずかしいが、一応作品も紹介しよう。写真上段の恐竜(体長約10cm)はプラスチック粘土でつい最近作ったものだが、プラキオザウルスのイメージオブジェのつもり。今は2匹だが、様々な色で仲間を沢山作ってやろうかと思っている。



下段の作品は言わずとも知れた今井科学社製のサンダーバード秘密基地のプラモデル。子供の頃、模型屋のショーウィンドーの高いところに飾ってあるのを眺めて憧れていた。でも、とても高くて買ってもらえなかった。10年程前に吉祥寺のユザワヤで発見し、長男の3歳の誕生日プレゼントにかこつけて購入し製作した。その後、彼が飽きて放置していたのを、プラ板でプールサイドなどを作り、ミニフィギュアや鉄道模型用の草木、砂浜等を配してレストアした。今はビニルケースに入れて飾っている。一番気に入っているのは4号(潜水艇)と、岩山の質感。電池を入れればまだ動く。

●公開質問

DGvol. 33号 Case-3の写真は神宮球場ですよね。一方(左側)はライトスタンド、もう一方(右側)はレフトスタンドからのアングルに見えますが、実際に球場に行って撮ったのですか？うさおはテレビからのキャプチャー画像ではないかと言っています。

お察しの通り神宮球場で、4/30の「ヤクルト×阪神戦」です。この日は家族4人で観戦しました。Case-3の左写真中央に小さく写っているのが小2の次男と家内です。阪神帽を被っていることからお分かりのように彼は阪神ファンですが家内は特に臙膺チームはありません。一方、中3の長男はヤクルトファンなので私と一緒にライトスタンドで観戦していたのです。因みに、昔巨人ファンだった私は、今は中日ファンです。



DGvol. 23号初登場の紙面でTomy Jr.さんはこう語られています。「Tomy Jr.手始めのテーマは『Design』です。私はこの道を職業には選びませんでした。私の母は服飾デザイナーだったため、デザインへの興味、関心は小さい頃からありました。私の父は新聞社に勤めていましたので、デザインについての文を書くというのは、いわば私の宿命のような気がします」その宿命について、DGにおける執筆ネームの由来を交えて、もう少し詳しく教えていただけますか？

婦人服の服飾デザイナーをしていた母親が、ある新聞社の文化事業として開催されたファッションショーがきっかけで、新聞社の広告部長をしていた父親と出会って私が生まれました。いわば、「デザイン」と「新聞」と「ショー」の中で生まれた私が、看板やプレゼンテーションのデザインについて文章を書くというのは、まさに宿命ではないかと思えてならないということです。執筆ネームの由来ですが、母の名が「トミ」でしたから私はトミの息子、つまり Tomy jr.というわけです。

DGに誘われた時、またはDGのことを聞いた時、参加してもいいと思ったのはなぜか。実際参加してみて居心地はどうか。参加しようと思った時に、これをDGでやろうときめてたことはあったか、またそれを実現したか。

文章を書くことは好きなのですが、何かのキッカケがないと書けないものです。同人誌は定期的に締め切りが来るし発表機会が増えるのも有益、他の人の文章を読むのもモノ書きとしての自分を鍛えるのに刺激になると思いました。何を書くかは決めていませんでしたが、今は狙い通りに進んでいる気がします。居心地もいいですね。

●次回の登場人物はCaccoさんです

リレー企画ということで、私が次回の登場人物を指名せよとの編集長のご命令。私としては知り合いである矢澤洋爾さんやタツノオトシゴさんを指名するのが順当でしょうが、彼らの「素顔」はある程度知っています。逆に素顔を一番知りたい相手を指名しようと思い、これまで写真でチラッとしか見えない謎の美人、Caccoさんを指名します。

(2005.6.15)